
エクソシストを愛したアクマ

夢月 那由紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エクソシストを愛したアクマ

【Nコード】

N6577H

【作者名】

夢月 那由紀

【あらすじ】

任務のため、エクソシストの神田ユウとアレン・ウォーカーはロンドンに来ていた。アクマを一体取り逃がしてしまった2人は近くの宿を借りる。そこで出会った少女に神田は不信任を覚え、見張っていたが……原作のクロウリーとエリアーデみたいな関係&話になります。

Opening

仮想19世紀末。

ここでは世界を終焉へ導こうとする者、千年伯爵と黒の聖職者^{クラージマン}、エクソシストとの戦争が起きていた。伯爵とエクソシストとの戦争が始まったのは、約百年前、ひとつの石箱^{キューブ}が発見されてからだ。

そこに入っていたのは古代文明からの一つの予言とある物質の使用方法だった。そのある物質とは“神の結晶”と呼ばれる不思議な力を帯びた物質。それが“イノセンス”だった。

イノセンスの争奪戦がこの戦争の目的。

エクソシストが負ければ、石箱^{キューブ}が記した約七千年前と同じ、“黒の三日間”が再来してしまう。千年伯爵の目的こそが“暗黒の三日間”の再来だった。

イノセンスは暗黒の三日間… ノアの大洪水により、世界中に飛散した。その数は全部で109個。

多くのイノセンスを手に破壊しようと、神を殺す軍を伯爵は造り上げた。それが、AKUMAだった。

AKUMA それは千年伯爵の兵器^{オモチャ}。

エクソシスト それはAKUMAを破壊する者。

両者は決して交わることはない。

そのようなことがあれば、異端の徒として世界から葬られるであらう。

そうなることは分かっている……

両者は惹かれあい、恋に落ちてしまったのだ……

第1夜 出会った少女

エクソシストの神田ユウは今、任務のためロンドンにいた。

「チツ…」

神田は今、機嫌が悪かった。その理由は今回の任務のパートナーが原因だった。

「いつまで機嫌が悪いんですか！ さつきから何度も謝っているでしょう？」

「謝って済むなら警察はいらねんだよ！ てめえ、入団して結構経つのに未だにドジを踏むとは才能ないんじゃないのか？」

「才能とか、関係ないでしょう！ それに今回はたまたまです！ いつも逃がしている訳じゃありません！」

アレンが正式にエクソシストとなってもう1年は経つ。アクマが見える左目がある限り、半径300メートルくらいの範囲ならば、見失うことはないのだ。

「それに、この町に入ってから、アクマを目の前にしても左目に反応がないんです」

「そんなものに頼っていたら、早死にするぞ」
小さく、神田が呟いた。

分かってる。

自分以外のエクソシストは皆、自分に近づく人間はアクマだと思っっている。

ラビに言われたあのとき、自分も同じ覚悟をしたんだ。

もう一生、左目が見えなくても皆と同じ、エクソシストとしての覚悟を…

「どこかいい宿ありますか？ こんな時間だから…」

故障やケガでなければ、左目がアクマを察知しないことなど有り

得ない。この町には何かある、と踏んだ神田とアレンはもう暗いこともあり、この町で宿を取り、調べることにした。

「済みませーん」

「はい？ 宿泊の方ですか？」

一軒の宿を訪ねると、出てきたのは自分達とあまり、年齢が変わらないであろう少女だった。長い黒髪を後ろで束ね、お団子にしていた。瞳は大きく、黒々と輝いている。髪と瞳だけを見ると、日本人のようだったが、ぎこちない英語を聞いているとそうである、と断言できた。

「二名様ですね」

エクスシストの証である、団服を見ても動じない彼女がアクマではないだろう、と2人は推測した。優しく微笑む彼女にアクマの仮面は似合わない。

「あの、お部屋が一室しか空いていなくて…ベッドは二つあるのですが、申し訳御座いません」

「誤らないで下さい！ 突然訪問して、宿を貸して頂けただけで助かりました。ありがとうございます」

「…ではお部屋へ案内致します、こちらへ」

小さな蠟燭を手にすると、彼女は階段を上り始めた。その後をアレンと神田は付いていく。

「ここです、何かありましたら私は下にいますのでお呼び下さい、では」

一礼して、彼女は出て行った。

広いとは言えないが、決して狭くもない部屋にベッドが二つあった。大きなベッドが二つあっても、歩く十分なスペースはある。

「おい、モヤシ。まだその眼、見えねえのか？」

ベッドに座りながら、神田は低い声で聞いた。

「操作しようとしても、動きません」

「そっか」

神田は曖昧に話を終わらせようとした。

「何か気になることも？」

「否…」

そう返答すると、神田は何か思い立ったようにベッドから立ち上がった。

「あ、ちよつと神田？」

今度はアレンの声を無視し、部屋を出て行った。

「おい」

部屋を出た神田が向かった先は少女のいる、受付だった。

「はい、何でしょうか？」

「聞きたいことがある、今、時間あるか？」

「はい」

神田は一般人に話が漏れることを避け、外に出た。少女も一般人であるだろうが、何か知っていることがありそうであった。今はもう、町は静まり返り、通行人などは見えない。少し離れた森での動物の鳴き声が不気味だ。

通路沿いにあるベンチに座ると少女にも座るよう、神田は促した。
「お前、日本人だな？」

第2夜 嘘

「はい、貴方もですか？」

驚きもあつたが、彼女にはそれ以上に安心感が顔に表れていた。

「ああ、俺は神田っていうんだ。お前は？」

「瑠衣と申します」

自分を真っ直ぐ見つめてくれる人間は初めてだった。

瑠衣はすつと目を悲しげに細めた。

「いつ、日本を出てきた？」

「14歳のときですから…4年前です。妹と一緒に」

妹がいたのか…おそらくは、あの宿に。4年前に14歳だったということは今は、18歳。自分と同じだ、と神田は確信し、瑠衣の遣う敬語が気に入らなくなってきた。

「神田様はそのときの日本の状態をお知りになりたいのですか？
どうやら、察しは付いていたらしい。」

「そうだ」

「そのときにはもう、日本は伯爵の楽園になりつつありました」
俯きがちに言う瑠衣に神田は一瞬、その言葉を聞き流しそうになった。“伯爵”何故、一般人がこの名を知っているのか。

「ちょっと、待て。何故、千年伯爵を知っている？」

「あ、それは… 両親が教団に関係していたので…」

少し、納得しがたかったが、ここで嘘だという証拠もない。今は、瑠衣の言葉をただ真に受けているしかないのだ。嘘か本当かは、分からない。

「それと、お前。敬語は止めてくれないか」

「…うん」

同じ歳のものに敬語を遣われるのは居心地がいいものではない。

「神田は…いつからエクソシストに？」

それを問われたのはそれほど多くはなかった。もしかしたら、片

手で数えられるくらいかもしれない。問われなかったのは、神田が周りの人間と関係しなかったから。でも今は、会ったばかりの人間と話している。否、これは任務だ。

「10歳の頃だ…それ以上は何も知らない」

本当は知らないんじゃない。これ以上は言いたくないだけだ。

「そうなんだ…」

「この町が最近変だ、とか思ったか？」

アレンの左目が機能しないこと、この町に入ってから感じていた渦巻いた空気、まるであのときのようだった。怪盗Gの事件であった、教会内での状況と似ている。まだ確かめてはいないが、もしかしたらこの町からは出られなくなっているかもしれない。

「最近…？特に変わったことは…」

「そうか…そろそろ戻るか、夜は冷える」

小さく、こくりと頷いた瑠衣は黙って神田の後をついていった。

「じゃ、おやすみなさい」

部屋まで送ると言いだした瑠衣と別れ、神田は部屋にはいった。もう既にアレンはベッドですやすやと寝息を立てていた。

情報収集という頭はこいつには無いのだろうか、と神田は一発アレンを殴りそうになった。

伯爵様は私がどれだけ進化したかだけしか興味を持ってくれなかった。

私がどれだけ、人間を騙して材料にしても褒めてはくれなかった。エリアーデのように少しは綺麗になっても全然褒めてはくれなかった。

だって、私はアクマだから…

全てがこの言葉で片付けられる。

だって、私はアクマ。伯爵様に造られたただの殺人兵器。ただ、

そのためだけに私は在るの。だけど……人間って羨ましい。

恋が出来て、結婚出来て……私にはそれが出来ない。

エリアーデが言っていたことは本当だ。恋なんて許されない私達、
アクマが引かれるのはそれを壊す、存在のみ。

私が引かれたのは……神田なのかもしれない……

第3夜 次の朝

「おはようございます」

早朝、宿を出ていく神田を見た瑠衣はにこやかに朝の挨拶をした。それに「ああ…」という返事が返ってきた。

教団員が見たら、たぶん、驚くだろう。

神田の後ろには、アレンがいた。神田に違和感を感じなかったらしい。まだ、眠いのか目をごしごしと擦っている。ついでに欠伸まが出てきた。

「おはようございます、えっと…」

アレンに目をやり、瑠衣は困ったように口元に手を寄せた。

「あ、おはようございます。僕、アレン・ウォーカーっていいいます」
「気分はいかがですか？ ウォーカー様」

アレンは瑠衣が自分の名を知りたいのだろう、と解釈し、名乗った。

瑠衣は何故、自分の知りたいことが分かったのだろうか、などという無駄な考えはせず、名を聞くと、先ほどとは打って変わりにこやかに接した。

「最近、休む時間がなかったので久し振りに休めて、スッキリしました」

そう笑いながら言うものの、先ほどの欠伸から考えると完全回復はしていないらしい。

「無理はなさらないで下さいね、まだ、回復はなさっていない様子です」

「モヤシだから、仕方ねえんだよ」

神田もアレンと共に行動していることから、あまり十分な睡眠はとれていないだろうが、アレンとは顔色も全く違う。

「モヤシ…?」

「違いますよ、バ神田だから何度言っても覚えられないんです。そ

ういえば、貴方の名前は？」

「私でございますか？」

名を問われることは極、稀なことだ。誰も私には興味を待たない、そう思っていた瑠衣には嬉しいことだった。

「はい、貴方です」

「瑠衣、と申します」

嬉しいことで、瑠衣は自然と口元が綻びた。

「朝食を用意してありますので、どうぞ」

赤らめた頬が落ち着くまで掌で触れていると、だんだんと引いていくのが分かった。やっと落ち着くと、瑠衣は神田とアレンを食堂のような場で案内した。

「お姉ちゃん、こんなに作ってどうするの」

瑠衣より、少し小柄な少女が両手に料理を乗せたおぼんを持ち、今にも落としそうなほど、不安定な足取りでこちらに向かって来ていた。

「どうして、わざわざ大きいものを持つてくるのよ。落としたら大変でしょう？ 軽いものや小さなものを持つてくればいいのに…持つてくるのが大変なものは置いておいてくれれば、私を持つてきたのに」

「お姉ちゃん、質問に答えてないよ」

“お姉ちゃん”と言っているところを見ると、どうやら瑠衣の妹らしい。

黒髪の瑠衣とは違い、少し茶色がかった髪の色。瞳の色もその髪と同じだ。

「砂雪、お客様をご案内するのが先でしょうか？」

「あの、瑠衣？ この子は？」

「妹の砂雪です」

瑠衣は妹の砂雪をアレンと神田に紹介すると、厨房に入って行った。瑠衣の後ろ姿を追っていたアレンと神田は砂雪に席へと案内さ

れた。

「どうぞ」

案内した砂雪がアレン、神田の顔を「うん…」と小さく唸りながら、まじまじと見た。

「何だ？」

少し不快に思った神田が軽く砂雪を睨み付けた。

「いえ」

「何か？」

アレンも不審に思い、砂雪に問うてみた。砂雪はちらり、と厨房の方に目を向けると瑠衣がまだ来ないことを確認した。

「お姉ちゃんには内緒ですよ？」

アレンに念を押すと、砂雪は話し出した。神田は興味なさそうに瞼を閉じた。

「お姉ちゃん、もう18だから彼氏でも作ってほしいなあ…」と思っ
て。お姉ちゃん、2人のこと、気に入っているみたいだったし」

「だからって俺らを勝手に候補みたいにするな」

急に神田が言葉を発したのにアレンと砂雪は驚いて、肩をビクリと震わせた。アレンも砂雪も、話など神田が聞いていないと思っ
ているのだ。

「神田、聞いていたんですか？」

アレンは「てつきり、興味がないから聞いていないと…」と小さな声で付け加えた。

「色恋沙汰に興味はないが、話は聞こえている。腹が立つ話だったから口を挟んだだけだ」

アレンは神田を甘く見ていた。神田の口から“色恋沙汰”なんて言葉が出てくるとは思わなかった。あの神田がどこからそんな言葉を聞いてくるのだらう。ラビが教えたのか、それともリナリーか。

しかし、アレンの抱く疑問を神田に投げかけようとは思わなかった。きつと、酷い目に遭う。経験値を積んだアレンの内なるものが伝えたものだった。

神田自身に聞くよりはラビやリナリーに聞いた方が安全であると、アレンは確信していたのだ。

第4夜 次の日（前書き）

更新が遅れました

これからは更新が亀並みに遅くなると思います
気長にお持ちいただければ、幸いです

第4夜 次日

お待たせしました、とにこやかにやってきた瑠衣にアレンも笑顔でお礼を言った。だが、これは作り笑いだ。何故かさつきから神田の眼力が強くなっている気がする。多分きつと、もの凄く機嫌が悪いんだと思う。

嫌だなあ…神田との任務って…どうして機嫌が悪いのを他人に当たるかなあ…

「おい、モヤシ」

「ふあんれす（なんです）…？」

「早く食え。任務に行くぞ」

テーブルに並べられた大量の料理をアレンは片っ端から食べていく。そのスピードは驚くほど、早いものだった。

「じゃ、行ってきます」

「行ってらっしゃいませ」

普通なら、1泊やそこらした客なら“有り難う御座いました”と言つべきところなのだろうが、瑠衣は神田とアレンが戻ってくるだろう、ということを確認していた。

だって、この町からは出られないもの…

瑠衣のこの笑顔もアレン同様、作りものだ。人間に溶け込むための人間臭く、人間らしい、と思わせる賢い術。これがどこまで通用するのかは、分からなかったが…

「お姉ちゃん…？ どうかした？」

砂雪が心配そうに顔を覗いてくるが、すぐに瑠衣は逸らした。たぶん、今はきつと歪んだ顔をしている。そんなのをどうしてしているかは、自分でも分かっていなかった。

「さあ、早く掃除してしましましょう」

何もかもを、掃除してしましましょう。人間も、伯爵様の為に…

「神田あゝどこにいるんですか、アクマなんて…」

数歩神田の後ろを歩きながら、辺りをきよるきよると見回して言う。

「煩い、疲れたなら宿に戻っていていいんだぜ？ モヤシ」

モヤシ、と言われた瞬間アレンはむっとし、つかつかと足早になった。神田に並ぶように、歩く。だが、それに負けじと歩くような神田ではない。自分のペースを保ちながら、慎重に辺りを警戒する。たぶん、今のアレンは辺りを警戒する、などということは頭には無いだろう。

「何か、気になっていることでもあるんですか？」

「ちらり、とアレンを見ると神田は小さく「ああ」と言った。

アレンには何も感じてはいなかったが、やはり経験値の差で感じるものが違うのだろうか。アレンもエクソシストになって結構経つが、周りのエクソシストと比べるとやはり、自分はまだまだだ、と感じる。

「どれだけ捜しても、見つからない。」

「何がです？」

「アクマに決まっているだろう。その他に何かがある？」

アレンは肩を竦め、ハア…と溜息をついた。どこまで神田は任務遂行を第一としているのか…

「神田、そこまで、どうして任務に拘こだわるんです？」

「……」

「あ、ちよつと神田！」

「お前に教える必要はない」

「失礼な」

確かに失礼な話だが、神田の場合、ただ単にアレンなどに説明する必要はない、というだけ。遠まわしな神田の良い方だが、本心言えば、他人には知られたくないというものである。

「神田って、どうしてそんなに周りを悲観して見ているんですか」

「それが“俺”だからだ。それ以外に理由はない」

「そうですね…」とアレンは呆れたように再び、肩を竦めた。神田には、必要以上に関わらない方が得策だ、と思いながら。

第5夜 推測

夕方頃、カラン…と小さくベルの鳴る音が厨房にいる、瑠衣の耳に届いた。

お客様か、と思った瑠衣は急いで手に持っていたものを置き、手を洗ってカウンターの方へ行った。今は、砂雪には買い物頼んでいないため、ここには瑠衣一人しかない。予約が入ってはいないから…と油断するものではなかった。

「えっ？ 神田様とウォーカー様」

その言葉は朝言った言葉と辻褃の合わない点があり、何か白々しい感じがした。

「済みませんが、しばらく泊めてもらえませんか？」

少し疲れたように薄く笑いながら、アレンはそう言った。否、実際疲れているのかもしれない。息が乱れ、神田もアレンの後ろで溜息をつき、その表情には疲れが見えた。

「それは構いませんが、どうかなさったのですか？」

一般人には情報を漏らさないことが常識だが、この町の奇怪に関することだ。ある程度のことを伝えておいた方があるいはスムーズに任務が遂行できるかもしれない。情報を手に入れるには、話さなくてはならない。それを神田はアレンに目配せした。

「え」と、ですね。この町から、出られなくなっただんです。理由は分からないんですけど…それで瑠衣さん、何か気になる点や、思い当たる節はありませんか？ そうえば最近、こんなことがあったなあ…とか」

体全身を使って表現するアレンに苦笑する瑠衣。

「あの、真面目に話しているんですけど…」

「あ、ごめんなさい。そうねえ、変わったこと…特には」

「そうですね」

少しは情報が手に入るかも、と期待をしていたが、新しい情報は

得られなかった。やはり、自分たちで探すしかないか、とアレンは落胆する。これでは、いつまでかかるのだろう。町の中を見回っ

いても、対して町人には会わず、情報は得られなかった。
「そういえば、最近あまり町人を見ませんね。買物は町外れに行っているものですか、あまり支障はないのですけど」

「そうですか、ありがとうございます」

アレンはぺこりと頭を下げると部屋に戻って行った。その後、神田も続く。軽く瑠衣を睨む神田に瑠衣はお構いなく、微笑みかけた。

「何か気になることでもあるんですか？」

「何がだ？」

質問しているのはこっちなのに、とアレンはにこやかながらもイラッときたが、それは顔に出ないように頑張っているものの、やはり顔が引きつる。

「瑠衣ですよ。さっき、睨んでいたじゃないですか」

「ああ、それが」

それが、とは失礼なものだ。もちろん、アレンに対してではないく、瑠衣に対してである。一応、似非でありながらも、英国紳士を装っているアレンからすれば女性に対する大変失礼な言動である。

「この町が、前の孤児院みたいになっていると思っただけだ」

「孤児院…ああ」

ティモシーのことか、と納得するとアレンはそのときの状況を思い出していた。

確かあのときは左目が使えなくて、方舟のゲートが作れなくなつて、孤児院から出られなくなっていた。そして、今は町から出られなくなっている。だが、広さが前の倍以上はある。いくら千年伯爵でもこんな短期間でそのようなことが出来るのであろうか。

「広さが桁違いだつて言っていてえんだろ？ そんなこと、千年伯爵にとっては何でもないことだと思っぞ。短期間でアクマを増やし、卵の番人を作り上げたんだ。このくらい、訳ないだろう」

「そう、ですか」

思考を読まれている、気持ちが悪い。アレンはやはり神田とは上手くやっていけそうにはない、と思い、部屋を出て行ってしまった。「ふん、テメエの考えることくらい単純で分かるんだよ」アレンの背中に向かって、神田は暴言を吐いた。

「あら？ ウォーカー様、どうかなさったんですか？」

「あ、いえ。神田と一緒にいるのはどうにも気分が悪くて手を軽く前に出して、さらりと言った。

「まあ…フフ」

口元に手を添え、瑠衣は上品に笑った。

「神田様はそんなに酷いお方なんですか？」

「酷いなんてものじゃないですよ！ 極悪人です。人でなしです。

心があるのか、つてくらい酷い人です。全ての言動に棘があります」「そうなんですか？ とても私にはそうは見えませんが…」

前に話したときも棘があるようには聞こえなかった。瑠衣から見るとはとても優しい人だった。

「瑠衣は騙されているんじゃないですか？」

「そうでしょうか？」

「絶対そうに違いありません！」

どうしてもアレンが言うような人には瑠衣には思えなかった。だが、神田は自分を偽るようなことはしないと思う。だから、どちらにせよ、アレンと接する神田も、瑠衣と接する神田もどちらも本物の神田だ。偽りの姿ではないだろう。

「私はどちらの神田様も偽りではないと思います」

「瑠衣…」

まるで恋をしているような言葉だった。

もしそうならば、このような綺麗な人が何故、神田なんかを……もつと相応ふさわしい人がいるだろうに。

アレンが瑠衣の眼を見ると、幸せそうに輝いていた。

ああ、そうか瑠衣は神田のことが…
アレンには理解しがたい神田に対する感情であったが。

第6夜 疑惑

「あの…もしかして」

アレンはそこで言葉を止めた。これ以上言いたくはなかった。言ってしまうばそれを認めることになってしまう。

「何でしょうか？」

「あ、いえ…」

言いかけた言葉を止めて、不審がられるのは当たり前のことだったが、瑠衣はそれ以上アレンに問い質すことはせず「そうですかとそれだけを言って器用に包丁を使っていた。」

「見ていても構いませんか？」

黙って見ているのは失礼だろうか、といかにもアレンらしい紳士的な一面を見せていた。もしかしたら瑠衣が自分を見てくれるのではないか、と思つて。

「結構ですよ、良ければ色々お話を聞かせてください。暫く滞在なさるのでしよう？ 同じくらいの年ですし、仲良くなれたら嬉しいですわ」

やはり、醸し出すオーラは美しいものだった。笑う姿も、どこか気品がある。

「そうですね、何を話したらいいですか？」

そう言つて、アレンは瑠衣に微笑みかけた。

「そうですね…無難に自己紹介的な感じからでしょうか？ 好きなこと、好きなもの、最近の出来事など」

「好きなものはみたらして…」

瑠衣は包丁を手に軽快なリズムで食材を刻んでいく、アレンはその横で時折、人差し指を立てながら楽しそうに話した。

「はあ…」

神田は一人、部屋で溜息をついた。窓辺に座り、微かに開く窓か

ら吹き付ける風が神田の長い髪をなぶる。さらりと揺れる髪が美しい。だが、その表情は険しく、眉間には皺が寄っていた。

何かが気に食わない、何故、逃げたアクマが姿を現さない？ 何故、だ……何が気に食わないんだ……？

ふと窓の外を見ると月が雲に隠れるところだった。

「お姉ちゃん、買い物行ってきたよ」

笑い声が響く厨房に、買い物から帰ってきた砂雪が顔を出した。満面の笑みを浮かべるアレンに、その話を聞いて上品に微笑む瑠衣。どちらも砂雪には幸せそうに見えた。

「おかえり、砂雪。ちょうど夕食ができたところよ。私は神田様を呼んでくるからアレン様をお席に案内して差し上げて？ 料理は運んでおくから」

皿に盛り付けながら、瑠衣は砂雪に指示を出す。砂雪はシンクの前に立ち、蛇口を捻^{ひね}って手を洗うと買ってきたものを冷蔵庫に詰めていく。

「あ、瑠衣。手伝います」

「あら、悪いですね。アレン様はおお客様ですもの」

「特別扱いしなくていいですよ。あと、アレンって呼んで頂ければ僕としても嬉しいです」

瑠衣の手から皿を持ち上げるとアレンはずっと言いたかったことを言った。瑠衣はそうだったのか、と悟ると「分かりました」と素直にアレンに皿を手渡した。

「では、神田様を呼んできます」

神田がいる部屋ではあれから月が雲から顔を出すことは無かった。それと同じく、神田の心も晴れない。自分の推測が正しければ、瑠衣は多分……

そのときだった。部屋の扉がノックされた。「神田様？ 居^おられますか？ 夕食の用意ができました」

「……………」

わざと、神田は何も答えなかった。もしかしたらこのまま黙っていれば、瑠衣が入ってくるのではないか……その可能性に賭けてみた。

「神田様……？ 入りますよ？」

やはり、そう思った神田は不自然さがないように窓辺で黙っていることにした。

「あら、居られるのならお返事してくださいね………どうか、なさりましたか？」

「俺達がこの町から出られなくなった理由、お前なら分かるだろう？」

神田の只ならぬ雰囲気に瑠衣は違和感を感じ、聞いてみることにしたらしい。余計なことを聞いてしまわないように気をつけていたのだが……

「何故、そう聞くのですか？ 私に分かるわけないでしょう？」

「いや、お前は知っているはずだ。お前、アクマだろう？」

第7夜 壊れる数十分前

「何を言うんですか？ アクマ？ なんですか、それ」

「芝居は止める、真実を聞かせてくれ。お前の考えも」

神田の表情からは何も読み取ることができなかった。

エクソシストである神田がアクマである瑠衣を生かしておく理由はない。もしもアクマだと分かっているならば、即、破壊すべきなのだが。

「話は、後でしますわ。今はアレン様と砂雪が夕食の席で待っています。これ以上待たせるわけにはいきませんわ」

「…分かった。だが、後できちんと話を聞かせてもらう。いいな」

「はい…」

やはり、何かを隠しているような返事だった。「Yes」と返事したことから、神田の推測は間違っていなかったらしい。

「後で行く。先に行っていてくれ」

神田は瑠衣から視線を逸らし、窓の外に向けてとそう言い放った。

「はい…」

先程と同じ返事をして、瑠衣は部屋から出て行った。

「アクマでも、改造アクマなら、どうする…?」

同じ日本人だからか、神田は瑠衣に安心感を抱いていた。久し振りに話せた母国語。それを話しているときだけ、神田は気楽でいることができたのだ。瑠衣に何か、特別な感情があった。

神田はどこかで、少しだけ、瑠衣を破壊したくない気があった。それはエクソシストとしてあるまじき感情だ。

「改造アクマなら、破壊することはないか…」

そう呟くと、神田は部屋を出た。

夕食の席に行くと、アレンがちょうど大量の食料を摂取している

ところだった。

「ふあんだ、ふおそふあつたれふね（神田、遅かったですね）」
「食いながら喋るな」

口から飛ばしてはいないものの、あまりの行儀の悪さとマナーを分かっていないアレンに神田は呆れる。

「食べないんですか？」

ゴクンツ、と大きくものが喉を通っていく音が聞こえると、アレンは神田に言われたことを改めた。

「寄生型のお前とは違うんだ。食わなくても大して異常はない」
食べるとしてもいつも蕎麦の神田だ。少しだけ食べれば十分動くことができる。装備型は寄生型と違って便利な部分が多くある。イノセンスの力を十分に発揮できないのが、難ではあるが。だが、せっかく作ってくれたものに手を付けないというものも失礼なもの。神田は一応、礼儀というものは心得ているらしく、箸に手を伸ばした。

それと時を同じくして、瑠衣は席を立ち、どこかへ行ってしまった。

「お姉ちゃん？」

「ちよつと、外を歩いて来るわ。気分が悪くて…」

「大丈夫？ 部屋で休んだ方が…」

席を立て瑠衣に歩み寄る砂雪。ゆっくりと手を伸ばし、瑠衣の額に触れようとしたが、拒まれてしまった。

「大丈夫よ、今日はずっと中にいたから…外の空気を吸えばすぐに良くなるわ」

「そう…一人で大丈夫？ 倒れたりしない？」

「大丈夫。一人の方が気が楽でいいわ」

弱々しく微笑むその姿には、どこかやつれが見えていた。自分の言葉がこんなにも影響させてしまったのか、と神田は内心焦り、戸惑い、懺悔の思いもあった。

今、行けば怪しまれる…少し、間が空いてから行くか…

神田は出て行く瑠衣の背中を見つめ、そのようなことを思っていた。

第8夜 愛はなんと素晴らしい

瑠衣は一人、街灯の下のベンチに座っていた。辺りは既に暗く、通りを歩く人などいない。人がいないこの時間、一人で考え事などに耽るには都合のいい場所だった。静かで、ひんやりとしたこの場所。所は。

そこに近づく人物がいた。

「誰ですか？」

瑠衣はその人物を見ると、驚き、目を見開いた。

「ティキ・ミック卿…何故、このようなところに…」

ノアのティキ・ミックだった。浅黒い肌に額には七つの聖痕。元々少し長かった髪が、メモリーの覚醒で長くなった。そして、腕や肩、胸に刻まれている深い傷。

「あのエクソシストが好きか？ 瑠衣」

「何を…？」

「あの、神田というエクソシストが好きか、と聞いているんだ。レベル4」

自分の本当の姿はレベル4という醜い姿の千年伯爵オモチャの兵器。

「何故、人を愛してはいけないのですか」

「兵器オモチャに感情があるか？ 答えは“否”だ。そんな物は必要ない。

兵器はただ殺戮さつりくを繰り返して進化していればいい。そして俺たちの目的達成のための力になっていればいい。それ以外にお前らには存在理由はないんだ」

以前のティキには考えられなかった言葉だ。エクソシスト退治など、真剣には考えず、ただの暇潰しとしてやっていた。

白いティキと黒いティキ。どちらもあるから楽しい人生。以前からも殺すことに快感を覚えていたティキだが、今はそれはより一層強まっている。

「暫く、時間を下さい。少しだけ、恋をさせてください。エクソシ

ストをこの町に足止めして、他のエクソシストもこの町に来るようになれば、一気に殺すことができているでしょう?」

ただ、神田と少しでも多くの時間を過ごしたい、と一身であった。アクマと言えど、元は普通の年頃の女の子。恋に花を咲かせたり、と青春時代を生きる歳だ。

「いいだろう、だが、少しだけだ。14番目が現れたのを知っているだろう? 千年公は闇を広げるつもりだ」

「分かっております」

自分は何故か、人間やエクソシストを見ても、殺してしまいたい衝動を抑えることができた。傍にいつもいる砂雪も、エクソシストの神田も。アレンに対しても、特別な感情はなかったが、ここでアレンを襲えば砂雪や神田にバレてしまうと思えば、自身の姿を曝すことはなかった。

自分はどうやら、以前聞いたことのあるエリアーデというアクマと似ているところがあるらしい。

恋する女は美しく、愛し、愛されることは素晴らしい。それを自分分は知りたかった。愛してみたかったのだ、愛されたかったのだ。心から……そして、それを想うあまり、一番していけない男ひとに恋をしてしまった。

人間を愛すより、エクソシストを愛す方が何倍も罪は重い。

「神田様」

誰か近づくのを感じた瑠衣は、振り返らず、神田の名を呼んだ。

「何故、俺だと分かった」

「このような時間にこの町を出歩くものは居りません」

「それはここが死人の町だからか?」

「死人?」

アクマが紛れているとはいえ、死人とは穏やかではなかった。そこまで人間がいけないわけじゃない。この町は殺人衝動をかるうじて抑えることのできるアクマが集うエクソシストの墓場。

人数は極少人数だが、アクマがいるとは微塵も感じていない、何も知らない普通の人間もきちんと生存し、暮らしている。

「この街にはアクマしかいない。そうだろう？」

「違います。砂雪のほかにも人間はいます。何も知らずに毎日を暮らしている」

「お前がこの町のボスなのか？」

「分かりません」

「お前は何を考えている？」

自分でも分からなかった。神田を愛したいが、愛せず。偽りの愛を語っても幸せにはなれない。そして、偽りであろうとなかろうと、いつかは殺さなくてはならない。

「神田様、貴方を愛したいのです」

少しだけ、熱っぽく呟いてみて、薄く涙を浮かべた瞳をゆっくりと神田に向けて上げた。本気だった。だが、それを神田が受け止める保証はどこにもなかった。

教団内でも冷徹人間と表されてきた神田が、アクマなど愛すわけがない。神田を知る者なら、全員がそう言うだろう。

「破壊を強制されたのが、何を言う」

「元が人間なら、そういう感情を持つのが稀まれでもあると思うわ。：

私は貴方が好きなの。貴方を愛したいの。でも許されないのは、分かるでしょう？」

「アクマだからな、そして俺はエクソシストだ」

第9夜 罪を背負う覚悟

そう言われることは分かっていた瑠衣は大して驚きもしなかった。神田の瞳も鋭い光を帯びたまま。

「そう言われる、と思っておりました。神田様：私を破壊してください」

元より覚悟の上だった。神田に近づこうと決心したのは、もし自分が神田に受け入れられればそれで良しとし、受け入れられなければ、破壊してもらうつもりだった。

愛する者を自身の手で汚すなど、どうやっても望まないこと。

「いくつか、聞きたい。俺達が破壊し損ねたアクマがお前なのか？」

「：はい」

「何故、俺なんかが：？」

「安心したのです。周りにたくさん仲間がいても、元の姿の国籍は違い、孤独感がありました。いくらこっちの国の生活、文化に慣れたとはいえ、日本を懐かしみアクマらしからぬ感情が生まれました」

瑠衣は神田の問いの意味をよく理解していた。たった二日間で、神田の性格なんかも知った。だからこそ、神田は一番肝心な言葉は言わないと分かっていたから、自分で連想させて瑠衣は答えた。

「俺も安心していた。気が楽になれたんだ。だが、お前がアクマだと知って、このままではいられないと思った」

「同じ感情ですか？」

「そうかもしれない。だが、俺自身も分かっている。今まで抱いたことのない感情であるということだけが分かる。：俺は他人に蔑まれようと構わない。咎められなければそれでいいと思っている。

数少ない日本人をこれ以上減らしたくはないし、俺だって、気の楽になれる時間が欲しい」

神田は割り切っていた。アクマだが、自分を目の前にしても殺人衝動を抑えられている彼女を。おそらく瑠衣は幾人もの人間を殺し、

レベルアップしているだろう。自我を持ち、殺人衝動を抑えているなんてレベル1やレベル2の為せる業ではない。レベル3でも難しいだろう。だとすれば自然と瑠衣はレベル4かそれ以上だと考えられる。

下手に戦えば自分が死ぬ。かといいつつも人間形態時の瑠衣といえるのは心が安らぎ、落ち着く。

以前と比べ、人間らしい感情を抱くようになった神田にはそんな瑠衣を破壊することは困難だった。今はまだ、深い感情を抱いていないからこそ、割り切っている。しかし、ある感情がもし芽生えたとき、割り切るなどと甘いことでは終わらない。きつとそれを抱いたとき、神田は瑠衣を本当の人間だと思ってしまう。

「今はまだ、破壊しない。だが、いずれお前が俺たち教団側に脅威だとなった場合は、破壊する」

「それでいいです。私も神田様を殺したくはありません」

まつすくな瞳めをしていた。迷いのないまつすくな美しい光を帯びた瞳め。

宿に戻った二人は何もないように装った。

神田は任務の仮面。瑠衣は経営者の仮面をそれぞれ被った。

もうとつくに食事を済ませていたアレンは部屋に戻り、ベッドの上で体を休ませていた。15歳の少年がこの過酷な戦いを生き抜くためには、休養が大事であった。ましてや、自分が教団側に脅威になる、などと聞かされれば緊張感も高まる。

だがアレン自身がそのことを、教団側が言った以上には誰にも、何も言わない。そして、周りの仲間もそれについて語らず、問うことはしない。皆、訳ありだと知っているからこそ、余計だと思われることは決して口にはしない。

神田も同じだった。

戻ってから少しして部屋に戻った神田は横で眠っているアレンを

一瞥した。

決して仲が良いとは言えない二人だが、互いに互いを見つめている部分も多くある。それでいいと神田は思っている。

平静を装っていた瑠衣であったが、内心、不安が多かった。

アクマだと軽蔑されるなら、いつそのこと、破壊させるなり、嫌いになるなりしてほしかったのだ。瑠衣の恋は決して、永遠に許されることでもなく、実ることもない。

もし、恋に理由があるならば、許されない恋なんて存在するはずもなく、敵同士で想い合ってしまうような許されない恋が存在するのは恋に理由なんてないから。

アクマである瑠衣にとって、そんなことで悩むならいつそのこと、自我を捨て、冷酷なアクマになりきればいいだけのこと。だが、それはできなかつた。それを選ばず、瑠衣が選んだのは罪を背負って生きる覚悟。人を愛する素晴らしさを知ってしまった以上、それを捨てることはできなくなつた。

第10夜 夜明け

夜が明けるころには、神田は既に起きていた。

神田が眠ったのは夜中の1時近くで、今は明け方5時になるだろう、と行ったところ。神田は少しでも体を休めようとベッドに身を預けたものの、あまり眠れず、ずっと、考え込んでいた。

アレンは神田よりも早く寝てはいたが、まだ起きる気配はない。気疲れか、久し振りに監査官がいないことで気を休めることができたのだろうか。

そうだ、今回は監査官がいない。否いや いないのではない、この街に入れなかったのだ。気がついたら、背後うしろに彼、ハワード・リンクはいなかった。

神田はアレンを殴ってまで起こそうとは思わなかった。そんなに事を急いでも何も進展が起きる訳ではない。敵から姿を現わさない限り、今回のことは上手く事は進まない。そう思ったから神田は、大して朝早くから動こうなどは考えていなかった。

ふと気が抜けたのか、神田は糸が切れたようにベッドに身を埋めた。

夢を見た。昔の夢…俺が誰かと笑っている。ああ…あいつか…

もう逢うことは叶わない、そう思っていたはずなのに…黒の教団は邪よこしまと交まじわらない高潔な軍で在らねばならないただそれだけの理由で、暴走したあいつを、俺こゝろが壊した邪よこしまと交まじわらない高潔な軍…俺は、交まじわろうとしているのだろうか…？

あそこは息がしづらかった

最近は、それほどでもなくて…でもあいつと笑ったとき

より、幾分苦しかった

「ただ今のは、あいつと笑ってもいないのに、過ごしやすく感じられた」

「…田、…んだ…神田っ！」

「ん…」

神田が起きるとそこにはアレンの顔があった。あれから、やっと眠ったらしい。

「やっと起きた。珍しいですね、神田がこんな時間まで眠っているなんて。瑠衣が朝食だっと言ってましたよ」

「ああ…」

「どうしたんです？ 顔色が少し悪いですけど」

「何でもない」

「何です、そんなそっけない態度。人がせつかく起こしてあげたのに…」

アレンはぶつぶつ言いながら、先に部屋を出て行った。

目覚めが悪かった。滅多に見ない、夢を見た。そして、9年前のあいつが出てきた……。まるで、俺を責めているみたいだ。…そりゃそうか、今まで頑なにアクマを倒すことだけで生きてきた俺が、今更アクマになんて

神田は一度、髪紐を解くとまた同じ定位置ほどに結び上げた。そして一息つくくと、神田も部屋を後にした。

「神田様、おはようございます」

昨日のことなどなかったように、瑠衣が話しかけてきた。

「ああ…」

「どうかなさいました？」

あまりの平静ぶりに、昨日の瑠衣は同じ顔の同じ声の外見も同じ、ただ中身が違う人物ではなかったのだろうか、と違ってしまふ。

「いや…」

ふいつと視線を逸らして、神田も朝食の席に着く。アレンは既に大量の食糧を摂取し終えたところのように見えたが、アレン自身にしてはまだまだ足りないらしい。空になった皿が山になって、右へ左へと揺らめくものにも気にせず、がつがつと口に運んで行く。これが教団内のジェリーの料理なら未だしも、こんな町の小さな宿屋の少女に何時間使わせれば、こんな大量の料理を作ることができよう。暇潰しがてらに是非、聞いてみたいものだ。

「こんな量の料理、何時間かければ作れるんだ…？ 普通じゃねえだろ、こいつの食う量」

「お二人がいない間に砂雪と二人で作っているので、こつこつとやれば大変じゃないんですよ。それなりに時間はかかりますけどね、…丸一日ほとんど厨房に籠りきりです」

「あ、ごめんなさい」

アレンが瑠衣に無理をさせているのではないかと思い、謝ると「気にしないでください」と瑠衣の優しい声が返ってきた。

それは大変である、ということを柔らかく表現したようにも聞こえたが、深く事を考えずにアレンは食事をつづけた。教団の料理長ジェリーの言葉を思い出したからだ。料理を作る側からすれば、それを満足して美味しそうに笑顔で食べてくれるなら、それは幸せなのだ、と

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6577h/>

エクソシストを愛したアクマ

2010年10月9日13時46分発行